

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652167

研究課題名(和文) ラオス北部における危機言語および在来知アーカイブスの構築のための基礎研究

研究課題名(英文) Basic research for constructing archives of endangered languages and local knowledge in northern Laos.

## 研究代表者

加藤 高志 (Kato, Takashi)

名古屋大学・国際開発研究科・准教授

研究者番号：20377766

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者の加藤は、ラオス北部を中心に、いまだ不明点の多い危機言語であるモン・クメール系のムラブリ語、ポーン語、タイ・カダイ系のセーク語、ヤン語等について、語彙調査および文法調査を行った。その結果、ポーン族、ヤン族は言語的に混質的であることが分った。研究協力者の園江は、生産工具の利用と技術を中心に聞き取りと観察による調査を行い、犁・水車に関してタイ文化圏独自と推定される技術を見出すと共に、ハチ類の利用について、この地域で報告のないハリナシミツバチの原初的養蜂技術を確認した。

研究成果の概要(英文)：Kato, principal investigator, conducted lexical and grammatical elicitations mainly in northern Laos of little-described endangered languages including Mlabri and Phong (Mon-Khmer language family) and Saek and Yang (Tai-Kadai language family). The research shows that Phong and Yang are linguistically heterogeneous. Sonoe, research collaborator, investigated mainly the usage and technology of production tools by observation and interviews, found the technologies of plows and waterwheels which are estimated to be unique to Tay Cultural Area, and confirmed the primitive technology of meliponiculture beekeeping which has not been reported in this area.

研究分野：言語学

キーワード：ラオス 危機言語 在来知 ムラブリ ポーン セーク ヤン ハリナシミツバチ

### 1. 研究開始当初の背景

ラオスは、2008年に公式の民族分類が確定した多民族国家であり、一方で、家鶏の祖先にあたるセキショクヤケイや野生イネなど、人間と生き物の関わりをみるうえで重要な生態資源が現存している。しかしながら、遺伝資源保護等の観点から生態資源保全の取組みはあるのに対して、多民族社会における言語の状況や、生産活動および生態資源利用に関する在来知は、十分に調査・記録がなされていない。また、同国における社会経済開発の急速な推進の背後では、公用語であるラオス語の普及等により、詳細が不明なまま消滅の危機に瀕している言語が多数存在しており、同様に、諸民族に固有の生産と資源利用に関する在来知およびそれに伴う技術も消失が懸念される。研究代表者の加藤と研究協力者の園江は、この地域において、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「シャン文化圏に関する総合的研究」等を通じ、「タイ文化圏」の枠組みで言語および物質文化に関する調査を進め、これまで全く先行研究のなかった言語および物質文化に関する報告を含む成果を発表してきている。

### 2. 研究の目的

上記の調査結果を踏まえ、研究代表者の加藤は、ラオス北部を中心に、いまだ不明点の多い危機言語であるモン・クメール系のムラブリ語、ポーン語、タイ・カダイ系のセーク語、ヤン語等について、語彙調査および文法調査を行う。研究協力者の園江は、ラオスにおける諸民族の在来知に係る伝承を記録する。また、併せて稲作を中心とした農耕および野生動物等の生態資源利用に関わる技術の観察・聞き取りおよび生産工具の観察・計測により、生産工具と技術体系の分布を明らかにすると共に民族間の関係性について分析する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究代表者 加藤高志

本研究では、3種類の語彙調査票と1種類の文法調査票を用いて、言語調査を行った。語彙調査票は、Kingsada and Shintani (1999) で用いられた303項目からなる語彙調査票、Bradley (1979) が作成した866項目からなる語彙調査票、Diffloth (1980) が作成した604項目からなる語彙調査票を用いた。文法調査票は、自分で簡単なものを作成した。

2012年度は、2012年8月に27日間、2012年12月から2013年1月にかけて17日間、2013年3月に13日間、合計57日間の言語調査を行った。調査地はフアパン県、シエンクアーン県、ポーリカムサイ県、サイニャブリー県である。調査したモン・クメール系言語はポーン・ピアット語、ポーン・ペーン語、ポーン・タブアン語、ポーン・ブン語、イドゥップ語、クシーンムール語、タブン語、マ

レン語、ポーン語（ポーリカムサイ県）、トゥム語、リハ語、プライ語、ムラブリ語である。調査したタイ・カダイ系言語はプータイ語、セーク語である。

ポーン・ピアット語、ポーン・ペーン語については、収集済みの語彙のチェックを行い、さらに604項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。ポーン・タブアン語、ポーン・ブン語については、収集済みの303項目の語彙のチェックを行い、さらに604項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。イドゥップ語については、未調査であった老齢の話者を対象に303項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。クシーンムール語については、数種の方言において303項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。タブン語、マレン語、ポーン語（ポーリカムサイ県）、トゥム語、リハ語、プライ語、ムラブリ語（2名の話者）、プータイ語、セーク語については、303項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。

2013年度は、2013年8月に15日間、2013年12月から2014年1月にかけて20日間、2014年3月に14日間、合計49日間の言語調査を行った。調査地はウドウサイ県、ポンサーリー県、フアパン県である。調査したモン・クメール系言語はポーン・ピアット語、ポーン・ペーン語、ポーン・タブアン語、ポーン・ブン語、ポーン・ラーン語、クシーンムール語である。調査したタイ・カダイ系言語は白タイ語、ヤン語である。調査したチベット・ビルマ系言語はロマ語、コンサート語である。ポーン・ピアット語、ポーン・ペーン語、ポーン・タブアン語、ポーン・ブン語については、収集済みの604項目の語彙のチェックを行い、さらに866項目の調査票を用いて語彙調査を行い、基礎的文法調査も行った。ポーン・ラーン語については、収集済みの303項目の語彙のチェックを行い、さらに604項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。クシーンムール語については、数種の方言において、収集済みの303項目の語彙のチェックを行い、さらに604項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。白タイ語については、収集済みの303項目の語彙のチェックを行い、さらに866項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。ヤン語については、未調査であったウドムサイ県ナーモー郡ナーサワーン村のヤン語において、303項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行った。ロマ語については、収集済みの866項目の語彙のチェックを行った。コンサート語については、303項目の語彙調査票を用いて語彙調査を行い、さらに収集済みの866項目の語彙のチェックを行い、基礎的文法調査も行った。

2014年度は、2014年12月から2015年1月にかけて18日間の言語調査を行った。調査地はサイニャブリー県とポンサーリー県である。調査したモン・クメール系言語はムラブリ語である。調査したタイ・カダイ系

言語はルー語である。ムラブリ語については、2012年度の2名の話者とは別の2名の話者に対して語彙調査を行った。そのうち1名に対しては303項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。また別の1名に対しては303項目からなる語彙調査票を行い、その確認調査も行い、さらに、866項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。ルー語については、様々な蜂およびそれらに関連する語彙の調査を行った。

#### (2)研究協力者 園江満

これまでの研究から独自に作成した調査票および図解シートを用いて稲作を中心とした生産技術・作業に関する基本語彙と技術について聞き取り調査を行った。また、犁・水車などの生産工具を写真撮影し、各部位等を測定した。

2012年度実施の現地調査のうち、2012年8月の調査ではファパン県およびシエンクアーン県において水車に関する調査を中心に行った。特に、ファパン県では14世紀初めに西南中国における記録がある揚水水車を観察し、サム川本流と支流それぞれの2基の外形ほかを測定した。また、シエンクアーン県においては、焼畑民と考えられているフモンから、犁の使用に関する情報を聞き取った。

2012年12月から2013年1月の調査では、ポーリカムサイ県において、タイ系民族による陸稲栽培を中心に調査し、収穫方法として鎌による株刈りよりも穂摘具による穂首刈りが一般的技術と推定される認識を深めた。

また、2013年3月にサイニャブリー県において採集・狩猟民であるムラブリの生態資源に関する在来知の聞き取りおよびタイ系民族の製糖技術についての調査を行った。

2013年度実施の現地調査では、8月にポンサーリー・ウドムサイの両県において稲作技術・製糖技術と併せて、在来知と密接に結びついた生態資源利用技術であるミツバチ類の利用について調査を行い、ハリナシミツバチ *Meliponinae* による原初的養蜂の存在を確認した。

2013年12月から2014年1月の現地調査はファパン県において実施したが、製糖技術に関する調査のほか、シェンコー郡においてフモンが使用する犁の現物を観察し測定するとともに、関連する情報を聞き取った。

2014年3月には、ファパン県において現地調査を実施し、ハチ類に関する資源利用の情報を聞き取ると共に、実際にハニーハントを行うオオミツバチ *A. dorsata* コロニーを訪問し、採取の道具等を観察した。

2014年度は、2014年12月から2015年1月にかけてサイニャブリーおよびポンサーリーの両県において現地調査を実施し、蜜蜂および水車の利用概況について聞き取りを行った。

#### 4. 研究成果

#### (1)研究代表者 加藤高志

以下のようなことが分った。

セーク語 Gedney (1970)は、タイのセーク語について、50歳以下では末子音の l は n で発音するとしているが、本研究において調査したセーク語でも末子音の l は消滅しており、n で発音していた。また、Gedney (1970)で報告されている頭子音連続もなかった。

ヤン語 未調査であったウドムサイ県ナーモー郡ナーサワーン村のヤン族は、自分たちの言語はすでに失ったという意識を持っており、現在話している言語は、Kingsada and Shintani (1999)で報告されているポンサーリー県ブンタイ郡のヤン語とは異なることが分った。

ポーン語 ポーン族は、言語的にはクム語派とヴェト語派の2つに分かれ、ファパン県とシエンクアーン県のポーン語はクム語派に属し、ポーリカムサイ県のポーン語はヴェト語派に属することが分った。

ムラブリ語 言語調査ができた4名ともラオス語の能力が非常に低いこと、ムラブリ語は発音上、語彙上の個人差が大きいこと、左右、年、月などの語がない(言えない)ことなどが分った。

#### (2)研究協力者 園江満

農具の調査においては、これまで情報のみであったフモンの使用する犁の実物を確認することができ、焼畑民として認識される同民族の生産技術に新たな認識もたらしとともに、この地域における耕具の伝播と分布に関する貴重な情報を付加した

水車の利用では、西双版纳において確認されていない精米・製粉用の利用(ダニエルス1994)が、ポンサーリー県を中心としたラオス北部では一般的にみられることから、この地域の水車利用技術が、中国系の技術を基盤としながらも「タイ文化圏」独自の技術体系として構築されたものと考えられる。

ハチ類の利用に関しては、これまでこの地域で報告されていないハリナシミツバチによる原初的養蜂技術の存在が確認され、活用可能な生態資源利用技術が在来知の中に残されていることが改めて明らかとなった。

#### 引用文献

ダニエルス, C. (1994) 「西双版纳傣族の水車一係族における農具利用の一事例」C.ダニエルス・渡部武(編)『雲南の生活と技術』慶友社。

Bradley, David (1979) *Proto-Lololish*. London and Malmö: Curzon Press.

Diffloth, Gérald (1980) *The Wa languages. Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 5.2.

Gedney, William (1970) The Saek language of Nakhon Phanom Province. *Journal of the Siam Society* 57(1): 67-87.

Kingsada, Thongphet and Tadahiko Shintani (eds.) (1999) *Basic vocabularies of the languages spoken in Phongxaly, Lao*

P.D.R. Tokyo: Institute for the Study of  
Languages and Cultures of Asia and Africa.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

園江満(2015)「農耕と家畜の文化 タイ文化圏における事例から」家畜資源研究会報第14号 pp.17-21. 査読有

〔学会発表〕(計2件)

園江満(2013.3.30)「ラオス北部における水車利用の諸相」日本熱帯農業学会第113回講演会 茨城大学(茨城県稲敷郡)

園江満(2014.3.28)「ラオスにおけるミツバチの伝統的利用に関する予察報告」日本熱帯農業学会第115回講演会 東京大学(東京都文京区)

〔図書〕(計2件)

Kato, Takashi (2013) *Linguistic survey of Phong language in Lao P. D. R.* Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. 100p.

園江満(2014)『山地民としてのタイ Tay』, C.ダニエルス編, 『東南アジア大陸部 山地民の歴史と文化』. 言叢社. pp.277-318.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

加藤 高志 (KATO, Takashi)

名古屋大学・大学院国際開発研究科・准教授  
研究者番号: 20377766

(2)研究協力者

園江 満 (SONOE, Mitsuru)

日本大学・生物資源科学部・助教  
研究者番号: 90646184